

大野 晋
丸谷才一

日本語で一番大事なものの

中公文

中公文庫 ©1990

日本語で一番大事なものの

一九九〇年一〇月二五日印刷
一九九〇年一一月一〇日発行

著者 大野 晋
丸谷 才一

発行者 嶋中 鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トレープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八一七
振替東京二―三三四
ISBN4-12-201736-4
Printed in Japan

江苏工业学院图书馆

日本語で一番大事なもの

蔵書章
野一著
丸谷才一



中央公論社

目次

鴨子と鳧子のことから話ははじまる

感動詞アイウエオ

蚊帳を調べてみよう

「ぞける」の底にあるもの

「か」と「や」と「なむ」

已然形とは何か

「こそ」の移り変り

主格の助詞はなかった

鱧の味を分析する

209 186 162 139 114 90 56 31 7

岸に寄る波よるさへや

233

場所感覚の強い日本人

259

現象の中に通則を見る

283

古代の助詞と接頭語の「い」

308

愛着と執着の「を」

331

「ず」の活用はzとn

357

『万葉集』の「らむ」から俳諧の「らん」まで

384

「ぞ」が「が」になるまで

409

解説

大岡 信

431

日本語で一番大事なものの

鴨子と鳧子のことから話ははじまる

『万葉集』の影響

丸谷 式亭三馬の『浮世風呂』に鴨子かもこと鳧子けりこというアマチュアの女国学者が銭湯でいろいろ論じ合うところがあります。たとえば、けり子が、「鴨子さん、此間は何を御覧じます」と言うと、かも子が「ハイ、うつぼを讀返さうと存じてをる所へ、活字本うまじほんを求めましたから幸ひに異同を訂ただしてをります。さりながら旧冬は何角用事なんかくとにさへられまして、俊蔭しゅんかげの巻を半過なかばるほどで捨置きました」と。この言葉づかいが、腹をかかえて笑うしかないくらいおもしろいんですが、この鴨子鳧子という二人の女国学者の名前は、もちろん和歌でよく出てくる「かも」と「けり」に由来してつけた名前ですね。この鴨子と鳧子は両方とも本居信仰に凝こっている国学者だということになっています。「かも」と「けり」というのは、こういうときの名前のつけ方にも使われるくらいに、典型的に古典和歌的な言葉なわけですね。ことに「かも」はすごいんで、『百人一首』に「一人か

もねん」が二つあるでしょう。

柿本人麻呂

足引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜を一人かもねん

藤原良経

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしき一人かもねん

これでは、和歌を詠むなら「かも」を使わなくちゃならないような気持になるでしょう。ですから現代人でさえ、和歌といえど「かも」と「けり」という感じになってしまふ。おもしろいことに、二つの結合による「けりかも」という言葉さえあって、これは歌人および和歌を罵って言う言葉なんです。私はこの言葉を字引で見ただけで用例があがってないから、ちょっと怪しいんですが、とにかくこういう言葉があるとすれば、「けり」と「かも」とがいかにかに和歌の代表的な言葉であったかが、非常にはつきりする。「かも」は近世の和歌でも真淵なんかはずいぶん使っているし、近代和歌では正岡子規も一時期かなり使ったし、会津八一もよく使ってますね。いちばん使っているのは、斎藤茂吉でしょう。茂吉の若い頃の歌に、

罌粟はたの向うに湖の光りたる信濃のくにに目ざめけるかも。

監房より今しがた来し囚人はわがまへにゐてやや笑めるかも。

などがあるんです。戦後の日本の短歌のなかでいちばん評判のいい一首を選ぶと、『白き山』の、

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも。

です。これは戦後の茂吉の絶唱ということになっていて、つまり自動的に現代和歌の最高峰ということになってます。現代俳句の戦後の代表作が久保田万太郎の、

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

なのと対応するくらいの名作でしょう。ただし、この歌には、本当かどうか知りませんが、ちょっとしたゴシップがあります。疎開で故郷へ帰っていた茂吉が、弟子の結城哀草果と二人で最上川のはとりを散歩していたときに、哀草果が「実は冬の最上川の三角

の波を形容するうまい言葉を見つけたんです」と言って、「逆白波」という新語を披露した。するとやや先を歩いていた茂吉が振り向いて、こわい顔をして、「私がその言葉を使って歌を詠むまで、おまえは使ってはならない」と言った(笑)。それで哀草果は、師の言葉を守って、茂吉がこの歌を詠むまで使わなかったんですって。つまり、そのくらい大事にして、思いをこめて詠んだ歌、あるいは、こんなゴシップさえ作られるほどの歌、そこに「けるかも」とくるわけですね。

明星派は使わないんですが、例外的に吉井勇の『人間経』のなかに、

志みな違へども歌詠めばおほかたのこと忘れけるかも。

四国路へわたるといへばいちはやく遍路ごころとなりけるかも。

というようなものが少しあります。いうまでもなくアララギ派は『万葉集』の影響を受けていて一体に「けるかも」は、万葉の調子ですね。

大野「なりにけるかも」は『万葉集』のなかにずいぶんあると思いますよ。いまの話のように、「かも」はアララギ派では使うけれども、明星派ではあまり使わないというのは、それらの歌のグループが手本としていた歌集によっているんですね。つまり、

アララギ派は、正岡子規以来、伊藤左千夫とか長塚節とか、みんな『万葉集』を手本に仰いでいた。『万葉集』では、「かも」という詠嘆の言葉が普通に使われていたんですが、『古今集』になりますと、「かも」は五、六例しかないんですね。みんな「かな」になつてしまふ。

丸谷 私の調べでは、『万葉』は「かも」ばかり七百回くらい、「かな」が全然ない。『古今』は「かも」が六回で「かな」が六十八回。『後拾遺』になりますと、「かも」はゼロで、あとは全部「かな」、そんな具合でした。

大野 奈良時代に「かな」はないこともないんです。「能く^よ凪^{なま}れる水かな」というのが、『常陸風土記』にあります。

丸谷 奈良時代ではそれ一つだけですか。

「かも」の性格

大野 一つだけだと思います。「かも」というのは二つの合成語なんです、**「か」と「も」**の。「か」は疑問詞ですね。「あるか」とか、「これは月か」とか、「花か」とか……。これは自分の胸の中で疑うんですね。それを「ありや、なしや」と言うとき、相手に問いかける形になるわけです。「あるか、なきか」といえば、「あるかな、ないかな」という

自分自身の疑問で、自分では判断不能ということになるんですね。だから「か」と「や」とは、奈良時代には、大体「か」は自分には分らない、疑問だということ、「や」は自分の一つの考えがあつての上の質問という使い分けがあつたと考えられます。「や」は奈良時代初期のころには間投詞ですね。たとえば、「近江のや、毛野の若子い笛ふきのぼる」、この場合の「や」というのは別に意味がないんです。要するにこれは掛け合いで歌つたり、みんなでいっしょに歌つたりするものだから、「近江の」と切れたところで、「や」と一つ入れて音数を合わせたんです。「うれたきや、醜^しほととぎす」なんていうのも、「癪にさわる馬鹿なホトトギスめ」ということで、「や」はお互いの調子をとるときに、入れています。だから、誰かに働きかけたり、質問したり、あるいは調子をつけたりするときにやるわけなんです。

丸谷 あこのころの歌は歌謡性が強い、というより歌謡そのものだから。

大野 も少し見わたして見ると、古いところでは、「か」のほうは、「本当か嘘か」というふうな判断不能の意味に使うのが本来だったんですね。「か」は、非常に古い用法ですと、叙述の下につくよりも名詞の下に直かにつくんです。「今日^{けふ}か明日^{あす}か」「出でし月かも」というふうに。後で言いますけど、奈良時代より前には現代語の「……だ」にあたる「なり」はなかったんだから、「花なるか」にあたるところを「花か」とだけ言っただけですね。しかし、「か」だけでは、少しそっけなさすぎるので、もう少しやわらげ

たり、ニュアンスをつけたいときに、「も」を足したんです。

「も」というのは、現代では「これもいい、あれもいい」みたいに二つ並べて使いますね。しかし元来は二つ並べるものじゃなかったんです。「うれしくもあらず」とか、「年も経ず」とか、「すべもなし」のように、「も」が来るとその下の叙述は多くは、否定、推量、条件等で閉じる。つまり、下に不確定な表現がくるものだったんです。一つと確定するのではないものごとを表現することばだから、「あれもこれも」と、どちら一つと確定せず二つ並べるようになったというわけです。一つに決めて断定せず不確かな氣持をあらわすから、「か」の下に「も」を加えて「かも」とした。「か」は疑問で、それに不確かさをあらわす「も」がついてきたから、「かも」というと、「なのかなあ」という疑問をあらわすときもあるし、「なんだなあ」「どうもそうらしいなあ」という氣持をあらわすときもあるし、「本当にそういう氣持がなくなくなるなあ」みたいな氣持もあらわすというわけで、それで「かも」が疑問とか詠嘆とかを表わすことになった。これが、「かも」という助詞の最初だったと思います。たとえば、

ながのいみきおきまろ
長忌寸意吉麿

磐代いはしろの岸の松が枝むすびけむ人は歸りてまた見けむかも。

「磐代の岸の松が枝を結んだという人は、ここを帰り道にまた通って、幸せを祈って、松の枝を結んだこの松をもう一度見ただろうかしら」というわけですね。「実は殺されちゃったんだから見なかったんだけど、見ただろうか」という疑問の気持なんですね。音数を考えないなら、「見けむか」（見ただろうか）と言ってもいいわけだ。それを「も」を添えてちよつとやわらげるとというのが「かも」の普通の使い方だったわけですね。

丸谷 これは有間皇子のことを歌った歌ですね。

大野 そうです。有間皇子は松を二度とは見てないんです。

梅の花しだり柳に折り雑^まへ花にまつらば君に逢はむかも。

「もし梅の花としだり柳とを折って一緒にして供え花としておまつりしたらば、あなたに逢うことが出来るだろうか、出来ないだろうか」と思うんですね。

浦廻^{うづみ}より漕ぎ来し船を風早み沖つ御浦にやどりするかも。

「浦のめぐりを漕いで来たけれど強い風が吹くもんだから、沖の方の浦に逃げて、こん

なふうに宿りをしているんだなあ」と今度は詠嘆風になってくる。つまり疑問と詠嘆とが混じって移っていく。

丸谷 柿本人麻呂の、

鴨山の岩根し枕けるわれをかも。知らにと妹が待ちつつあらむ

の「かも」は疑問だけですか。

大野 「か」が疑問で「も」が不確かだなあという気持をあらわすわけですから、疑問と詠嘆とが両方に揺れるわけですね。こういうのをよく文法の先生が、疑問であるとか、詠嘆であるとか明確に裁断して教えるけれど、この歌などはその両方の微妙なところにかかっている、むしろそこにこの歌があるんですね。

「かも」「けり」は鳥の名前

丸谷 「鴨山」の「かも」と、「われをかも」の「かも」と二つ重なっていると、この歌のおもしろいところだとかねがね思ってるんですよ。ところが在来の評釈では、そういう遊び心のおもしろさは言わないわけですね。そういうレトリカルな楽しみを、